

第5回「地方創生研究会」 打合議事録

（敬称略）

日時：2022年4月11日（金） 18時30分から20時10分

場所：一般財団法人アーネスト育成財団内会議室

講師：六本木勇治（尾瀬パークホテル企画・営業・広報部長）

参加者：吉池富士夫（座長、芝浦工業大学理事）Zoom、
浅野昌宏理事（アフリカ協会副理事長）、
平田貞代（芝浦工業大学准教授）Zoom、
石井唯行（㈱ワンズディー代表取締役）Zoom、
石井博臣（㈱ワンズディー地方創生事業部、元館山市役所経済観光部長）Zoom、
六本木勇治（尾瀬パークホテル企画・営業・広報部長）、
西河洋一理事長 Zoom、
菰塚功（元埼玉県秩父農林振興センター管理部担当部長）、
前田光幸（評議員、エネルギー&イノベーション研究所代表）Zoom
小平和一郎専務理事
山中隆俊理事（㈱メデカルパーフェクト代表取締役社長）

欠席者：小坂哲平（小坂建設代表取締役）石井博臣

議事内容

1. 打ち合わせ概要

第5回目の「地方創生研究会」を開催した。今回は、尾瀬パークホテルの企画・営業・広報部長の六本木勇治氏を迎え、『おぜのさと倶楽部 ～みんなの未来を共に創る風土を目指して～』と題する講演をお願いした。

2. 提出資料

（1）『おぜのさと倶楽部 ～みんなの未来を共に創る風土を目指して～』（六本木勇治）

3. 講演概要

座長（吉池）：お忙しい中、皆さん参加いただきありがとうございました。

今日の議事につきましては、事務局提案の通りで、講演は尾瀬パークホテルの企画・営業・広報部長の六本木勇治さんに『おぜのさと倶楽部 ～みんなの未来を共に創る風土を目指して～』と題し講演をお願いしている。

挨拶（略）、メンバー紹介（略）。早速、講演をお願いします。

講演（六本木）：今回のテーマは『おぜのさと倶楽部 ～みんなの未来を共に創る風土を目指して～』としたい。私が取り組んでいるプロジェクトデザインという仕事と、家業の尾瀬パークホテルと地域との関わり合いについて話をしたい。

1. 自己紹介

自己紹介からはじめたい。

1980年に沼田市で生まれた。母の地元が片品村で、そちらに六本木家のほうの家業である尾瀬パークホテルがある。父親は、前橋市の出身で、2拠点で生活をしてきた。

財団とは、家業のほうの磨き上げを目的に、西河技術経営塾沼田校の2期生として学んだ。西河先生、小平先生、山中先生、浅野先生にご指導を頂いた。そのご縁でこの研究会に参加することになった。

地域活動歴

簡単に今までに携わった仕事と、活動歴について話す。家業の尾瀬パークホテルの事業との関

わりあいでのいろいろなプロジェクトに関わり合いを持ってきた。

（1）N3（New NUMATA Network）

ぬまた企業塾である。沼田市長の肝入りで行ってきた事業で、沼田市の起業家を育成するための事業である。沼田市内にコワーキングカフェを運営していたりしている。各種の起業家を支援するプロジェクトで、プロボノでスタートアップ起業の支援をしてきた。

（2）利根沼田夢大学

総務省の地域おこしの支援で、移住してきた人達と研究会を行っている。片品村や沼田市が、利根沼田地域の中高生達の青少年育成の土台として「利根沼田夢大学」という市民大学のプロジェクトにも関わりあっている。

（3）尾瀬沼田観光協会青年部長

主な地域活動は、地元尾瀬戸倉観光協会の青年部長に就任していて、もっかコロナ禍での新しい活動を模索している。加えて地元商工会青年部から選出され全国大会の運営委員になる。来年度、群馬県で全国大会が開催され、全国から3千人規模の会員をお迎えするにあたって、各青年部からその委員を出すことになっていて、そのメンバーとして現在、県域組織に出向中である。

（4）その他の地域創生に関わる活動

群馬県の知事から認定を頂き、多文化共生を地域で推進する委員になっている。

地元では提言活動も行って、地元紙の上毛新聞オピニオン21の委員として20代に活動した。加えて沼田市の市民構想会議という市政のチェック機能の委員も仰せつかって2年程活動した。

県内の政策系NPOや大学等で講座を受け持ち若いとき人前に立つ経験をしている。そのような経験もあって県内に様々な繋がりをつくることができている。大体の活動は、地元から広域につながる活動を群馬県内でしている。

（5）様々な地域創生プロジェクトと関わり合いを持つ

今まで、様々なプロジェクトに関わり合いを持って、どのような角度から関わってきたかを報告したい。

三方向あって、一つはプロジェクトをデザインしていく。事業構想系で、例えば、中心商店街の場所からご依頼を受けて、色々なプロジェクトを支援した。後は、プロジェクトマネジメント、プロジェクトコーディネートを担当した。クライアントの要望によって、その一つや複合的に関わり合いを持って取り組んできた。

2. 利根沼田地区について

（1）「山」「郷」「街」、県内の様々な地域との関わり

県内の様々な地域との関わりの中で気付いたことがあった。群馬県は首都圏の中にあるが、豊かな山の環境と、郷とよばれる地域と、街とよばれる地域で構成されている。それら「山」「郷」「街」という3要素を持っている。（図1）

産業や地政学的な構成がされていて、それぞれが重なりあっている。その中心に群馬県庁があることが、体験的に分かってきた。県都の前橋市や商業の都高崎市、県立女子大がある県央の玉村町。そういうところや県北部にある沼田市、真田家に関わりを持つ郷である。

母親の郷である片品村等、山のある地域に関わりを持つなかで、様々なエリアの特徴や共通点を知ることになった。

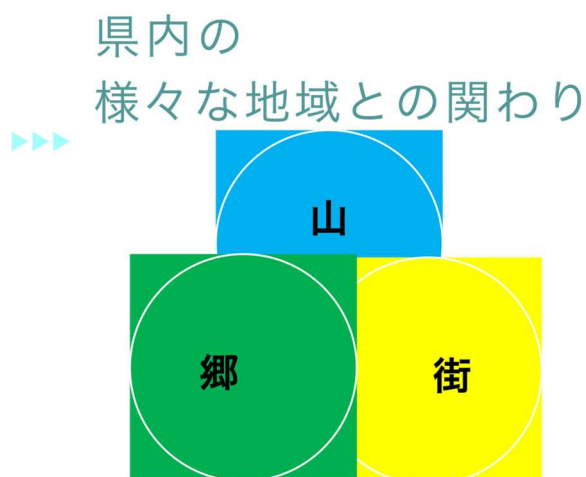


図1 「山」「郷」「街」、県内の様々な地域との関わり

（2）家業のホテルがある片品村について

次は、家業のある片品村について報告する。

片品村は、群馬県の最北の2つの自治体のうちの一つである。片品村の県境が尾瀬になっている。隣は日光東照宮のある日光市である。尾瀬は、奥日光ともよばれる場所である。

ピーク時の2000年頃の人口が6千人である。お客様も60万人から70万人来ていた。2020年になると2千人減少し、約4千人となった。観光客も減少している。2060年には、消滅可能性のある自治体である。2000年から2020年の20年で人口が3分の2になった。

（3）「レトロな山づくり」と題するPV（プロモーションビデオ）の制作

西河技術経営塾の2期で学んだことを生かして制作したのがこの「レトロな山ホテル」と題するPV（プロモーションビデオ）である。西河技術経営塾で学んだことを生かした内容となっている。お客様とのコミュニケーションづくりに役立てている。

3. 新たな取り組みへの芽生え

（1）コロナ禍で大きな変化が起きた

2019年までとコロナが発生したこの3年で課題の質と量が大きく変わった。

具体的にどのようなことが起きたかは、皆様のお住まいの地域や古里と変わりないと思う。従来から取り組んできた、地域の活性化事業が停止したままになってしまった。ここで、新たな考えや取り組みの必要性を感じる人が増えた。（図2）

これは、変わるチャンスだと思える。地域の特徴で、なかなか新しいことや変化することの壁を壊すことが難しかったところでも、実感として変化できるチャンスが来ている。

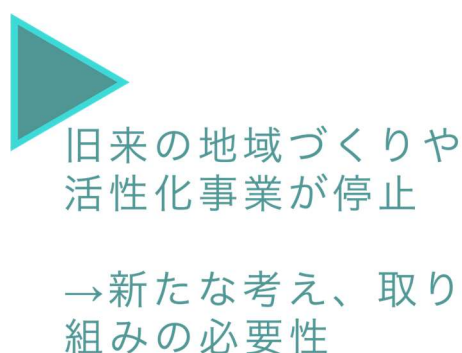


図2 活性化事業が停止

（2）快疎を目指す群馬県

その中で、片品村の行政に話を持っていっても、村という単位では、前向きに聞いてくれるとか、一緒にやろうということがなかなか難しかった。コロナ禍で3年経っても同じで、変わらなかった。

その中で群馬県が、行政としてはおもしろい変化をしてきている。その中で、我々の地域が関係していることについて報告する。

いま、元国会議員であった山本太一氏が群馬県の知事である。知事がコロナ禍で打ち出したことに「快疎を目指す群馬県」がある。「快い疎、人と人との一定の距離感、そして自然に囲まれた地域での生活が快適である」という意味合いで使っている。森林資源とか、空間資源をうまく活用した施策や地域づくりを県レベルで取り組もうという活動が昨年度から始まっている。

県域で消滅可能性地域を含む3つの広域の振興局で扱っている。我々が関わっているのが利根沼田振興局である。その利根沼田振興局の取り組みに昨年度から参加をした。中心の市となるのが沼田市である。加えて、片品村、川場村、昭和村、みなかみ町である。

それぞれに輝く部分がある。沼田市は、西河塾長の関わり合いのあるオリエントの工場があるとか、天狗神輿を女性が担ぐ特徴のあるお祭りがある。片品村には、尾瀬があると共にスキー場がある。川場村にはスキー場があり、東日本で一番お客さんがくるといふ道の駅、川場田園プラザがある。その道の駅は、加工品とか、地域ブランドが確立している。昭和村は、高原野菜や日本一のコンニャク芋の生産地である。みなかみ町は、利根川の源流点がある場所である。利根沼田地域は、自然が豊かで利根川の水源エリアで、水が豊富な場所である。緑が深い部分で構成されている。

それら5つの自治体と民間の人達と、行政が集まって、官民が共創するための地域との意見交換を含む未来共創ワークショップを3回開催した。その中の片品村の班に私が参加した。

官と民とが共創するためのプラットフォームとして位置付けであったが、ワークショップの先が見えてない状態であった。話し合っただけで終わらせてしまうことがもったいないように思えた。

（3）「おぜのさと倶楽部」をつくる

未来共創ワークショップに参加した地域の民間の方たちと、村の役場の人たちや観光協会の人、県職の方が参加して「おぜのさと倶楽部」をつくって、2月23日と3月23日にオンラインで2回開催した。先の未来共創ワークショップでは「みんなのみらいを共に創る尾瀬の郷倶楽部」、もう一つが「世界を目指せるアスリートの育成と村農業の継承」「尾瀬の魅力発信」の3つ項目がでてきていたので紹介する。

尾瀬の魅力発信 「尾瀬の魅力発信」というのは、従来から取り組んできたことである。東電子会社の社員の方が参加し、報告があった。

世界を目指せるアスリートの育成と村農業の継承 「世界を目指せるアスリートの育成と村農業の継承」については、新しい取り組みをしている方からでた。片品村は、3つの日本百名山を所有している。山林の空間利用をしながら、次世代のアスリートを育成しようとする試みである。自然に優しい農業を提案している。廃校を利用して、アスリートとか新しい表現者の人達との交流の場を提案している。更に磨き上げて、日本全国や世界から新しい人たちがくるといふ事業である。

おぜのさと倶楽部 今まででも先の2つの様な話は民間の中から出ていたが、村づくりとか地域づくりとなると、行政が抱え込んで、行政が実施をするという取り組みがされてきた。この度、群馬県が官と民を共創させていく取り組みに参加して、音頭を取りをしていただいたおかげで、この話し合いもできた。そのための話し合いの場とか、声の掛け合いとか、外から片品村と

関わりたいとの方々と人たちで「おぜのさと倶楽部」をつくる発案がされた。詳細については、報告を省く。

4. みんなのみらいを共に創る「おぜのさと倶楽部」

各カテゴリーがどのようにまとめられたかを報告する。

持続可能な片品村を考えたときに、それぞれのSDGsなどを考えながら、それぞれ事業をこれから形にすることの必要性がそのなかで見えてきた。みんなのみらいを共に創る「おぜのさと倶楽部」では、「未来に向けた人づくり」と具体的な案が出ている。

自分たちが、これから取り組むといっても50年後の未来となると、先のことで自分たちが主体で取り組み続けられるものではない。地域の子供たちや学生達が地域のプログラムに関わり合いを持たせられるようにしないといけないと考えている。

（1）世界を目指せるアスリートの育成と農業の継承

片品村の子供出生率は、一桁に低下している。この件について最初は問題ないと思っていたが、色々な方と話し合いをすると一学年一学級という問題が見えてきた。

実際、小学校低学年で出来た人間関係が中学を卒業するまでの9年間、同じヒイラルキーが変わらずに続いていくと、その中で不登校が生まれるという問題が起きた。

不登校の人達、勉強ができないかという、そのようなことは無い。もう少し能力を伸ばす取り組みを地域がしないと、地域に残りもしないし、地域に思い持って帰ってきてくれない。人生の早い段階で地域との関わり合いを無くしてしまうことに気付いた。 55:01

体を動かしたり、表現をしたりとか、大人と関わり合い持つ新しい試みを、廃校を活用して行うという案があり、実践されている。

（2）尾瀬の魅力発信

尾瀬のブランドづくりというのがある。尾瀬には、歩いてしか行けない。少なくとも片道1時間の軽登山をして、尾瀬の中の散策で時間を使い、1時間かけて軽登山をして戻ってくる。少し体力がある方しか行けない。

西河技術経営塾の中でも指導をうけましたが「国立公園手前の郷の部分で尾瀬を感じる場所をつくったらどうか」との話をもっていたので、自分たちの思いの中で、新しい思い出の場所を作っていく。観光客の受け皿をつくり、新しい雇用を生み出すことができる。尾瀬の魅力発信をしようとなった。

話し合いのベースから、今年度具体化しようという動きになった。県から新しく予算がついた。それをできるだけ早く、質の高いものにしたいと考え「おぜのさと倶楽部」を具体的な活動に使っていきたいと考えた。

5. 「郷とづくり」を「新しいコンテンツ」に

（1）プラットフォームの活用

それを言語化した。「地域内の関わりしろを解放し、外からの人と経済の流れを創る取り組みをやっていく」とした。地域のお祭りなどの事業は、内向きの交流になっていたが、今後このままではお祭りも維持できない事態になる。その中でやめていく傾向になっていたが、それを解放して、外から人の流れを作っていく。うまい形で途絶えさせないで、つぎに繋いでいく。プラットフォームを活用しながらやっていく。(図3)

未来共創 プラットフォーム

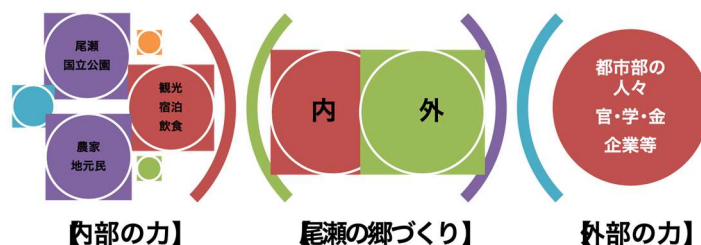


図3 未来共創プラットフォーム

具体的なポイントとして、尾瀬国立公園は、県や国の力が一番働き、価値を生み出している場である。しかし、地元民とかが混ざり合っていない。観光、宿泊、飲食等も連動していない。だからこそ新しい価値の創出はしやすい。

ここに至った経緯も片品村は合宿地的な観光地であったり、地域のもう一つの主産業である農業との協業を推進できていないなど、別府とか草津とかが行ってきた地域一体的な取り組みができていたらと反省している。これからは内と外の力をうまく使う。

外の力とは、都市部に住まわれている方で、都会生まれ都会育ちの方々。地方にはそういう外の力が弱い。環境省以外の付き合いが無いことが問題である。

内の力としては、高等教育になると片品村から利根沼田地域に出ないと教育をうけることができない。大学などの進学となると域外、県外に出てしまい戻ってくる割合はとても少なくなる。

(2) 里山×山里

目指す姿は、「里山×山里」というのを考えている。里山というと、尾瀬が自分たちの生活を守ってきた。ここについては国立公園化したこともあり、国の資金も入っているし、県の資金も入っている。それと尾瀬の敷地の7割を東電が持っていて、維持管理は東電がやっていることで保たれてきた。(図4)



図4 里山×山里

しかし、段々と観光地的な魅力が低下して、ほかの地域に流れていっている。それを山里で受け止めて、新しい地域の創発を促して新しい地域づくりができればと考えている。

（3）「さとづくり」を「新しいコンテンツ」に

そこで、ポイントになり考えが、「さとづくり」を「新しいコンテンツ」という考え方がある。いままで基幹産業として、グリーンシーズンは尾瀬がメインで、冬はスキー場となってきた。そこに顧客がきて、片品村は潤っていた。ニーズの変化や少子高齢化もあり、基幹だった部分から少しずつ中心がずれはじめてきた。

今までの基幹産業に頼っているだけでは、沼田市から片品村に上がってくる街道沿いに未来がないし、我々もこの次を見つめて未来を描くことができない。次に繋げようと検討していると、「心の古里が必要である」ということを言ってくれる方をコロナ禍で発見した。「心の古里が必要」と言う方もいて、是非外の力として我々の仲間になって頂いて、古里づくりを体験して頂いて、「郷づくり」に取り組んで欲しいと考えている。

6. おぜのさとプロジェクト

今、準備している「おぜのさとプロジェクト」について報告する。今年度から動き始めるのが、（1）水芭蕉公園づくり、（2）オゼギルド、（3）山育の聖地の3つである。

（1）水芭蕉公園づくり

水芭蕉公園づくりを考えている。尾瀬公園に入口の片品村尾瀬戸倉地域には、使っていない公園や地権者のいる使っていない山林がある。その中で、お年寄りでも訪れることができる場所づくりをする。水芭蕉を見られる場所を弊社内にもつくるが、地域全体で水芭蕉を栽培する。

敷地内や30分程度の散策で水芭蕉が見られたら良いということ、青年部の人達との会合で提案して賛同を得られた。昨年、東京電力の協力も得られ、水芭蕉の育苗が始まっている。3カ年で見る状態になるので、今後、3年で地元との交渉ができるようになればと考えている。

（2）オゼギルド

オゼギルドは、職人組合の意味合いがある。外の人達が、片品村で仕事ができる仕組みができると良いと考えた。外側から能力を持った人たちが来た時に、地域の課題とか、地元では仕事ができないことをマッチングしようとしたときに、対価を提供できる仕組みができると良いと考えた。対価とは、お金であったり、モノであったり、コトであったりである。

たまたま県のほうも同じような言葉で、政策を何か考えているということが分かった。バッティングせずに相乗りする形でアウトプットができると良いと考えている。

（3）山育の聖地

尾瀬という国立公園は、群馬県の中で、自然環境学習とか、自然体験とかのメッカとして、今まで進んできた。その背景をうまく生かして、地域ならではの教育の在り方の提案をしていければと考えた。その一つとして、「山育の聖地」というのを目指したいと考えている。

地域の教育体験プログラムを、今まで文科省と群馬県の教育委員会が行っていた部分をしっかりと自分たちの教育プログラムとしてきちんと昇華し、提供する仕組みとすることを考えた。

次世代が未来に伝えたい里山×山里づくりの風土をつくる

こちらの事業化も視野に入れている。先日、「山育」という商標の登録がすんだ。公告期間も終わって、安心して中長期で取り組めるコンテンツとなった。10年単位のプロジェクトにしている、「山育の聖地」を群馬県の北部から発信していければと考えている。

ここの部分の山育の対象者は、利根沼田地域のお客さんは、学校機関が多いので、一度だけでなくリピートして頂く。リピートしてくるお客様が、楽しさや喜びを提供する取り組みができればと考えている。

ポイントは、「次世代が未来に伝えたい里山×山里づくりの風土をつくる」を考えている。われわれの世代だけで終わらすのは、忍びないし、もったいないと考えている。

この自然豊かな水源エリアを未来に繋いでいく。価値の可能性を自分たちで考え、自分たちで提案していく。そして、外からの力をうまく生かしていく。そういう風土を作っていくための取り組みしたいと考えている。

以上となる。

【質疑応答】

座長（吉池）：ご講演、ありがとうございます。それでは、質問、アドバイスをいただけたらと思います。わたしのほうから。子供中心に考えるとありましたが、子供中心に考えると大人が付いてくる。逆に大人中心で活動を考えると子供はついてこない。従って、子供中心に考えることで、より多くの人を引き込むことがポイントか。

山と郷と街という3つがありましたが、例えば、山と海と街という発想ではいかがでしょうか。館山あたりでご感想いかがでしょうか。

意見（石井唯行）：色々なことをされてすごいなと思った。ホテルのホームページを見て、山サウナをやられているが、いかがでしょうか。館山の遊休施設を使ってどうかと考えている。

回答（講師 六本木）：アウトドアに積極的に取り組もうと始めた事業である。団体客が大きくなって、受け入れるには段取りが必要な対象で停止すると半年単位で客が来なくなる。個別客やグループに提供できるサービスを考えたときに、自分が2019年にエストニアに訪問した時に、ユネスコ無形文化遺産になるようなサウナ文化があった。自然の中で、自分たちの感覚を研ぎ澄ますような文化があって、それがおもてなしになっていた。体感物価は日本の3分の1であるが、そこでサウナを体験させるのに一人2百ユーロ（約2万円）取った。地方の山の中でサウナを2、3時間体験させるだけである。それが、記憶に残っていた。今回コロナ禍になっても、感度の高い人はいて、色々な人とつながりができた。山サウナプランは、リピート率が高い。そういうお客様のハードユーザーは、一年に10回来るようになった。友達を連れてきて、別棟1棟の貸しきり利用をしている。四季のサウナを楽しむようなこともでてきた。サウナのチームがあって、コンテンツを磨き上げる時に、東洋大学が研究費を使って調査にきてくれた。JR東日本の人が評判を聞きつけ、体験しに来てくれることが起きた。約2百万円の投資で、10倍くらいの売上ができた。その中で、地域との関わり合いを持ちたい都市部の人に来てくれた。

意見（小平）：真冬でもお客様がくる。

回答（講師）：山サウナがある片品村は、関東唯一の特別豪雪地帯である。冬のシーズンにサウナを好きな人は来る。テントの中は120℃で、外は、-20℃になる。ブリザードを体感しながらサウナを味わうことができる。その中のお一人で NEC のメタバースを研究している人たちから招待を受けた。

意見（石井唯行）：館山も冬のコンテンツが無かった。昔からの課題である。参考にしたい。

意見（石井博臣）：2年前まで館山市役所に努めておりました。沼田市と片品村を含めて、1市1町3村が、地域観光圏などの扱いや、荷帰りと宿泊の比率などはどのくらいか。

回答（講師）：日帰り観光的な、日帰り3対宿泊1である。1市1町3村が集まると大きな規模になる。コロナ前のときだが、観光客は日光市と利根沼田とは同規模である。コロナ前は、連携をしてなかったが、コロナになって、市町村連携型のDMO¹を組んで、新しく取り組みをはじめた。奥利根観光圏に取り組みを始めた。

意見（石井博臣）：外からの人材を招き入れる取り組みをしているが、それに対する取り組みの内容を教えてください。

回答（講師）：行政視点でみると、利根沼田地域の自治体では、地域おこし協力隊で希望者を制度移住させる取り組みをしている。その関係で一定期間移住してくる。9年間取り組んできたが、全国の制度移住の定住率は55%あるのが通常であるが、片品村で言うと16%以下である。せっかく友達になったのになぜ出ていってしまうのか。県内の自治体の移住担当者に電話してヒヤ

¹ DMO（Destination Management/Marketing Organization：観光地域づくり法人）

リングをしたことがあった。初めて分かったことが、制度移住の入り口はつくって出口は作っていない。移住が目的となっているだけで、定住、定着するための支援がなく、出ていかざる得なくなってしまう。定住するには、各市町村の条例が邪魔をしている。地域づくりにきた、活性化人材をみすみす外に出すことになっている。県のほうが少しずつ変わりつつある。

意見（石井博臣）：館山の水の事情は悪くて利根川から水を引いている。利根沼田地域の水を使っているの、これをご縁に連携をさせていただきたい。

回答（講師）：水つながりでよろしくお願いいしたい。

意見（埜塚）：群馬は水源がある。米作り体験がある。稲刈りとか、田植えとか。

回答（講師）：耕作放棄地がある、沼田市も新たに棚田百選に選ばれたところもある。

意見（前田）：土地が広いが人口は。

回答（講師）：人口4千人である。片品村で働いて、暮らしの場所を沼田市に移している人が多い。

意見（前田）：アクセスしやすくする取り組みはやってないのか。

意見（平田）：民間主導でここまで長期間持続されて、成果をだされている持続性は素晴らしいと思えた。六本木様と同じような活動をされているかたはどのような状態か。

回答（講師）：こうゆう取り組みをやる人は少ない。数人いる。コロナ禍でデジタルツールを使った仲間はある。尾瀬は好きだというリーダーもいる。17年間の地域づくりの経験の中で言うと、意識して人財をつくらないとバトンを渡せる人は出来ないと考えている。その中で青少年育成事業に取り組んでいる。いつから育成を始めたら良いのか。実際にバトンを渡そうとすると、大学生からでは遅かった。中学生から交流を持って高校まで交流をしていく必要があることが分かった。利根沼田夢大学という中高生が主体で取り組む市民大学の中で、交流の場での経験値を貯められて、ようやく数人ほど目が出てきた。7年くらい取り組んで、5人とか10人とかが将来取り組んでくれる人財が見えてきた。

意見（平田）：六本木さんのリーダーシップと皆さんの輪か感じられた。他の地域ではない。

意見（小平）：六本木さんの「水芭蕉公園づくり」「オゼギルド」「山育の聖地」とか、ワーディング良い。石井さんの館山も同じようなワーディングを考えて欲しいと考えた。

回答（講師）：西河技術経営塾での学びで、宿泊の先にあるビジネスモデルの先を探すときに教育コンテンツとして「山育」という言葉を考えた。

座長（吉池）：最後に西河理事長お願いします。

意見（西河）：ウクライナ問題、色々勉強している。SWIFTが停止し、金本位制に移行する。そうなると世界的に変化が起きて、会社がつぶれる。田舎の方に人が移動する。地方が変わる時代である。世界が大きく変わる時、準備しているところに人は移動する。都会から田舎に人は動いている。

意見（小平）：今回は石井さん両名で、館山で持っているコンセプトや取り組みについて、を報告して欲しい。今回は、6月か7月に開催したい。

座長（吉池）：今日はありがとうございました。

以上